

岐阜の伊奈波の芝居小屋

— 末広座と国豊座 —

Theaters in *Inaba* area of Gifu: *Suehiro-za* and *Kunitoyo-za*

土谷 桃子

要旨：

明治初年、岐阜の伊奈波神社の近隣に末広座、国豊座という芝居小屋が開場した。同地域は明治以前から繁華な地であったが、明治期に入ると「座」を名乗る小屋が複数開場し、「伊奈波三座」という呼称も生まれた。本稿では、伊奈波三座のうち、規模が大きく本格的な芝居を上演し得た末広・国豊両座を取り上げ、両座の開場時期や存在地、開場後の変遷について、現時点までの調査（関係者との面談、文献資料）で判明した事実を述べた。末広座は個人が開いたもので、焼失の憂き目に遭って再建されている。一方、国豊座は会社組織で運営されており、末広座焼失の間は唯一の本格的な芝居小屋であった。岐阜での興行には東西から役者が訪れているが、今回は、雑誌や新聞の記事が比較的多く残っている、東京の大物役者9代目市川団十郎、5代目尾上菊五郎、初代市川左団次の両座での興行実態を洗い出した。その結果、彼らが名古屋の興行の間に岐阜を訪れていることや、末広・国豊両座で役者を取り合う事態もあったこと、役者たちが岐阜興行の際に鶉飼などの岐阜の風物を楽しんでいたことが明らかとなった。今後は、両座の興行実態を時系列に整理すると同時に、上方役者や地元役者の動向を解明する必要がある。

はじめに

岐阜の伊奈波神社界隈は、濃尾地震（明治24（1891）年10月）等の影響で娯楽の中心地が柳ヶ瀬に移るまで、芝居や見世物が集まる繁華な地であった。明治期には「伊奈波三座」と呼ばれる末広座、国豊座、相生座（あるいは花角座）があったと伝えられる。

筆者は以前「板垣退助岐阜遭難の芝居～明治十五年の作品を中心に～」(『岐阜大学国語国文学』38、2012.3)を著し、岐阜の末広座において明治15年7月18日から板垣遭難劇「花吹雪伊奈波の黄昏」が中村七賀十郎一座によって上演されたことを述べた。現在の伊奈波神社近辺には、芝居小屋があったことをうかがわせるものは皆無であり、いったいどこに末広座があったのだろうかという素朴な疑問が生じた。末広座や本稿であわせて取り上げる国豊座については、『岐阜市史 通史編 近代』（1981）や『岐阜県史 通史編 近代下』（1972）に記載があり大いに参考になるが、より詳細に調べてみたいとの思いが募り、調査を開始した。調査はまだ道半ばであるが、現時点までに判明した事柄も少なからずある。本稿は中間報告として、伊奈波地域の芝居小屋の双壁である末広座と国豊座について述べることにする¹⁾。両座の姿を浮かび上がらせることが、同地域の明治期の芸能状況を明らかにする端緒となることを期待している。

1. 末広座 ～開場とその後～

末広・国豊の両座は、岐阜で最初に「座名」をつけられた古い劇場であるが（『岐阜市史通史編 近代』、p.1056）、両座が設けられる以前から伊奈波地域は賑わいの地であった。江戸時代について言えば、東伝寺人形浄瑠璃の興行（延宝4（1646）年～）、辻能興行（享保14（1729）年～）、岐阜大桑町の孫兵衛による歌舞伎芝居興行（享保16（1731）年以降～）が行なわれ、『天保十一年伊奈波神社境内図』（伊奈波神社蔵）には、「芝居小屋」「茶店」「揚弓小屋」が記されている。同地における江戸時代の芝居についての論考としては、岩佐伸一「岐阜いなば芝居と七代目団十郎」（岐阜県博物館『平成十三年度秋季特別展 七代目団十郎と国貞、国芳』図録、2001）があり、江戸期については約三十点の番付が確認できると指摘している。

この伊奈波地域に、いつ「座」を名乗る劇場が始まったのか、資料から類推していく。まず、末広座であるが、明治9年1月6日の『貳大学区愛知新聞』に以下の記事がある（空欄挿入、下線筆者。以下の引用にても同様）。

岐阜県旧官邸ヲ^{ヒラキ}開拓シテ一條ノ市街ヲ成セリ 此レヲ^{スエヒロ}末廣町ト云フ 新築ノ芝居小屋ガ出来マシテ 本月三日舞台開ヲ致シマシタ ^{ヤクシヤカンジャク}倡優翫雀中村賀七などにて ^{ヒイキ}最貞連中の ^{リツハ}幕水引立派に三番叟が有ましたと申うわさです

記事中の「旧官邸」は、現在の岐阜市新桜町から末広町にかけて存在した尾張藩の岐阜奉行所のことである。記事には座名が明記されていないが、『岐阜市史 通史編 近代』にある「末広座」番付－明治九年第一月吉日より岐阜末広座にて。（p.1056）に挙げられている主な役者に中村翫雀、中村賀七があり、新聞記事と一致することから、この「新築ノ芝居小屋」が末広座だと考えられる²⁾。

年代から考えて、この中村翫雀は幕末から明治初年に上方中心に活躍した3代翫雀（1841～81、文久3（1863）年襲名）であろう。中村賀七は、尾張名古屋の芝居に勤めることが多かった4代中村嘉七（1817～81）である。明治8年正月に七賀助を中村嘉七に改めている（『近代歌舞伎年表 大阪篇』1、p.272）。嘉七については、坪内逍遙が「少年時に観た歌舞伎の追憶」の「10章 実川延若と中村七賀助」で絶賛している³⁾。嘉七及びその一門と思われる「七賀」を名に持つ役者たちは、明治期にしばしば名古屋で興行し、近隣の岐阜にも訪れている⁴⁾。末広座の柿落しの舞台の役者に嘉七は適任である。

『岐阜市史 通史編 近代』には同年10月の番付（p.1057）もあり、嵐三五郎（6代、1851～1925、明治8年襲名）、嵐璃笑（2代、1849～1886、同5年襲名）といった名が見える。8年以降で筆者が確認できたのは15年の興行で、その間の末広座の動向は謎である。同座は、名古屋の『扶桑新報』が19年11月30日紙面に「去廿八日岐阜通信」として「末広座焼失 昨廿七日午後六時頃 当地末広町の同座にては 失火の為焼失及び類焼家屋二棟許りありたり」と掲載しているように、火事による焼失の憂き目に遭っている。そして、その後の再建も速やかではなかった⁵⁾。

先に述べたように、現在の伊奈波神社周辺には、芝居小屋があった名残は何もない。いったいどこにあったのだろうか。この疑問を解いてくれたのは、特定非営利活動法人わいわいハウス金華・岐阜市歴史博物館編『ふるさと岐阜・魅力発見大作戦 岐阜町金華の誇り』（岐阜新聞社、

2009)であった⁶⁾。末広町を含む金華地区の歴史を多くの写真とともに丹念に記した書籍である。末広座について以下のようにある。

末広町は、新たに県都になった岐阜町の中心部にできた貴重な空き地だったので、新時代の賑わいが流れ込み、随一の繁華街に生まれ変わった。その中心は、明治七年ころにできた芝居小屋末広座（現国島歯科医院）で、団十郎を始め多数の名優が来演した。（p.62）

現在の国島歯科医院は、1979年築の4階建てのビルである。残念ながら末広座の面影はない。

場所が分かると、次に気になるのはだれが末広座を始めたのかという点である。この点については、末広座の所有者の後裔である国島幹名子氏から直接詳しくお聞きすることができた。

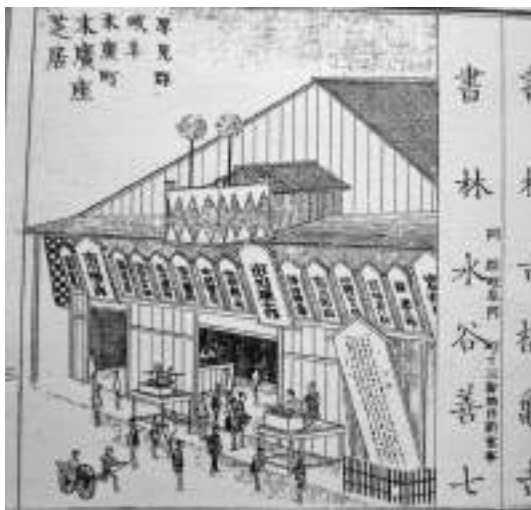
末広座の所有者は、国島氏の父である安藤作次郎という人物であった。安藤氏はもともと長良地域に住する一族であったが、末広町が新しく開けることに商機を見出し、同地へ移ったものらしい。作次郎は末広座のオーナーではあったが、没年から考えて明治10年頃の生まれであるため、彼自身が末広町への進出を決めたり、芝居小屋を開いたりしたのでは当然ない。おそらく作次郎の父安藤半助のアイデアであろう。末広町に移った安藤一族は、芝居小屋の他にも小間物を扱う勧工場「白木屋」を開くなど、同地の発展に尽力した。安藤半助、作次郎の詳細は不明である。今後の課題としたい。

三男である作次郎と長兄安次郎が写った写真も残されている。末広座には、上村松園の最初の師匠である日本画家鈴木松年（1848～1918）筆の緞帳があったのだが、その緞帳の前に作次郎と安次郎が並んでいる写真である。緞帳には「鈴木松年画伯筆」とある。末広座は昭和3年に火事に遭い、その際に緞帳にも火が移ったが、残存部分を生かして製作した屏風や、燃え残った端切れが保管されており、国島氏面会の折にそれらも見せていただいた。

国島氏によると、作次郎は真面目な人物で、芝居に熱中するような性格ではなかったそうである。軽薄のきらいがある役者とは交わらなかったが、各務原出身の役者市川百十郎（1882～1969）とは気が合い、よく行き来していたという思い出を語ってくださった。また、作次郎は、繁華の中心が柳ヶ瀬に移った後、出遅れたと言って残念がっていたという。しかし、もし作次郎が末広座を手離しその地が過去を知らない者の手に渡っていたら、平成の世に末広座の縁を尋ねることは不可能であっただろう。作次郎が末広町から離れなかったことに感謝しながら国島氏宅を後にした。

在りし日の末広座の姿を思い起こさせるものが2点ある。ひとつは、明治16年刊行の福井熊次郎編輯『農商工技芸 美濃乃魁 名所国産の手引』にある末広座の挿絵である⁷⁾。同書は美濃各地の名産・産業を全国に紹介するため、業種別に屋号・住所・取り扱い品目を記したもので、名所の挿絵も付されている。その1枚が「厚見郡岐阜末広町末広座芝居」と付された芝居小屋の絵で、役者名の看板が並んでいる。中央に市川権十郎、左端に市川団十郎、右端に下が切れているが岩井姓の役者名が確認できる。時期と役者名から類推するに、明治16年2月の末広座での団十郎一座の興行を写したものであろう⁸⁾。もうひとつは、末広座の鬼瓦である。1976年1月11日『岐阜日日新聞』朝刊掲載の「岐阜歳時記 伊奈波かいわい4 全盛築いた末広座」では、貸家として利用されていた旧末広座の建物に鬼瓦があることが記載されていることから、1979年に現在の4階建てビルに建て替える際に撤去されたと思われる。この鬼瓦は、現在岐阜県博物館に収

蔵されている。横77cm、縦（最大）47cmのずっしりと重い鬼瓦で、「末広」の文字がくっきりと浮かび上がっている。末広座が存在したことを雄弁に語っているように感じられた。



末広座の挿絵『農商工技芸 美濃乃魁 名所国産の手引』
(岐阜県郷土資料研究協議会復刊 1975)



末広座の鬼瓦（岐阜県博物館蔵 2014.10.23 撮影）

2. 国豊座 ～開場とその後～

国豊座がいつ開場したのかを明示する資料は残念ながら見当たらない。同座の最も古い資料は、管見では明治11年の役割番付（岐阜市歴史博物館蔵）である。「当る明治十一年寅の四月吉日より 岐阜稲葉桜町国豊座において」とあり、この時までには開場していたことは間違いない。演目は本朝出世鑑、妹背山婦女庭訓、男競三国湊で、役者名には実川延若、嵐三右衛門、中村雀右衛門等が確認できる。実川延若は、幕末明治初期の上方役者初代実川延若（1831～85）である。

少年時代を名古屋で過ごした坪内逍遙が、前掲「少年時に観た歌舞伎の追憶」で「10章 実川延若と中村七賀助」と題しているように、名古屋劇壇にも馴染み深い役者であった⁹⁾。岐阜での興行は、名古屋興行に前後して行なわれることが多く見受けられるのだが、この興行も同年5月の名古屋橘座の興行の役者名(『近代歌舞伎年表 名古屋篇』1、p.248)とほぼ重なることから、岐阜の後名古屋で一座が興行したと考えられる。名古屋に行くついでに岐阜に寄ると言うては言い過ぎだが、東西の芝居が集まる名古屋の地に近いことで、岐阜に豊かな芝居がもたらされていたことは事実である。

その後の国豊座の興行は、末広座と同様謎が多い。『岐阜市史 通史編 近代』には明治14年に松井須磨子が「白鳥の湖」を公演したとある(p.1058)が、根拠不明である。『岐阜日日新聞』で追うと、15年8月24日に、古川歌右衛門の一座が不人気で戯題替を相談中とあり、同9月17日には、首振り人形演劇が大入りとある。一方、この時期の末広座では21日から15代目岩井源水(松井の誤りか¹⁰⁾)一座の独楽廻し興行が行なわれている(同9月21日)。この後も末広・国豊両座で賑やかに芝居や相撲や見世物を興行し続ける。しかし、末広座が19年11月に焼失すると、国豊座の興行記録が際立つようになる。同座を末広座焼跡へ移転させる話もあったようだが¹¹⁾、末広座が後年再建されていることから、実現には至らなかったものと思われる。国豊座は濃尾地震で焼失したが再建¹²⁾、後に明治座、岐阜劇場と名前を変えて柳ヶ瀬に移転した。

国豊座がどこにあったのかを明らかにしてくれたのも『ふるさと岐阜・魅力発見大作戦 岐阜町金華の誇り』であった。同書によれば、現在賃貸マンション「イナバホームズ」が建つ地が国豊座跡地だそうである(p.68)。イナバホームズは伊奈波神社の登り口にある善光寺のすぐ目の前にあり、まさに盛り場の中心であったろうと想像される。同地にはイナバホームズ以前には紙器を扱う会社があったという(篠田氏、国島氏談)。

国豊座をだれがどう始めたのかは不明であるが、明治20年代後半には会社組織となっていたことが確認できる。岐阜の土地・産業・教育・警察等全般を調査した『岐阜県治一斑』の第1回実施分(明治28年)を見ると、「商業 会社」の項目に「国豊演劇合資会社 演劇場ヲ建設シ之ヲ賃貸若ハ演劇ヲ興行ス」とあり、「払込済資本金」が3,000円と記されている。同調査には67社が列記されているが、演劇に関する会社は国豊演劇合資会社のみである¹³⁾。国豊座の後身である明治座や岐阜劇場の経営母体から遡って調査することができるかもしれないが、現時点で明らかにできたのはここまでである。

3. 両座の興行資料

末広・国豊両座の姿を浮き彫りにするために、いつどのような役者が訪れていたのか、一覧を作るべく調査中である。現時点までに調査した資料、今後調査すべき資料を以下に列挙する。

【調査済資料】

A) 『歌舞伎新報』1号(1879)～2巻6号(1897)

同誌は、東京の歌舞伎新報社のち玄鹿館が刊行した演劇雑誌で、明治期の演劇研究に欠かせない資料である。東京の劇場を中心に、興行の筋書や劇評、時事情報等が豊富であるが、上方をはじめとした東京以外の地域の興行についても随時記載がある。同誌の「名古屋通信」

「名古屋便り」「音信」「雑録」等で岐阜に言及しているものを抽出した。

- B) 『明治十五年七月十二日～二十二年十二月二十九日「岐阜日日新聞」見出し一覧（発行順）』岐阜市歴史博物館、1988
『岐阜日日新聞』は、東京大学大学院法学政治学部研究科附属近代日本法政史料センター明治新聞雑誌文庫所蔵の原紙（明治15年7月12日以降）がマイクロ資料化されている¹⁴⁾。本書は15年から22年までの同紙の見出しを一覧にしたもので、手書き原稿がそのままコピーされているものである。見出しの取り方が21年分から簡略になり芝居関連記事はほぼ拾われていないため、21・22年については元資料に目を通して芝居に関するものを抽出した。
- C) 『岐阜市史 通史編 近代』岐阜市、1981
「第四節 芸能」内「伊奈波周辺の芝居小屋」に挙げられている末広・国豊両座の興行を整理した（pp.1054～1059）。
- D) 『岐阜県史 通史編 近代下』岐阜県、1972
「第一〇章 民俗」内「第三節 娯楽・観光」の「一 娯楽」に、演芸興行（一）、（二）がある。主に国豊座についての記載がある（pp.1005～1008）。
- E) 『近代歌舞伎年表 名古屋篇』1～2 八木書店、2007～08
岐阜の芝居に関連する記載を抽出した。
- F) 倉田喜弘編『明治の演芸』1～6 国立劇場調査養成部芸能調査室、1980～85
岐阜の芝居に関連する記載を抽出した。
- G) 清信重『岐高百年史』岐高同窓会、1973
芝居や見世物に関連する記載を抽出した。

【今後要調査資料】

- H) 『岐阜日日新聞』明治23（1890）年以降
B) がカバーしていない部分の調査が必要である。
- I) 該当年代の名古屋地区の新聞記事
岐阜地域で発行された新聞が欠けている時期については、名古屋の新聞を調べる必要がある（一部参照済）。有力紙と目される『金城新報』『新愛知』『扶桑新聞』等が対象となる。

A)～G)は、末広・国豊両座が芝居に限定した小屋ではなく、奇術、軽業、見世物、浄瑠璃等も行なわれていることを示している。また、芝居と言っても、経歴の分かる役者の興行がある一方、他では見たことのない役者名が並ぶ興行もある。芸妓芝居、女芝居もかなり頻繁である。このような雑多とも言える状況が、地方芝居小屋の生き生きとした姿だったのである。H)、I)の調査結果を盛り込んで、いずれ明治の岐阜の芸能の実態を一覧で示すつもりである。

現在までの調査で浮かび上がってきた両座をどう切り取って示すのがよいか、難しいところであるが、今回は、東京に基盤を置くA)『歌舞伎新報』が詳しいこともあり、東京の団菊左の岐阜での興行を取り上げることにした。

4. 団菊左の来岐興行

9代目市川団十郎（1838～1903）、5代目尾上菊五郎（1844～1903）、初代市川左団次（1842～1904）は「団菊左」と並び称された明治の東京の大役者である。彼らの末広・国豊両座での興行は、明治15年、16年、20年、29年が確認できた。それぞれについて以下に述べよう。なお、本章で述べる名古屋興行については、多く『近代歌舞伎年表 名古屋篇』1に拠っている。

① 明治15（1882）年2月 末広座（菊五郎、左団次）

演目は、義経千本桜、慶安太平記。菊五郎・左団次の一行は、前年12月末に東京を立ち名古屋に向かった。名古屋の橘座で、1月13日から26日に西南戦争記、大盃智勇賜、東土産開花夜嘶、2月24日から3月25日まで義経千本桜、嶋衛月白浪を演じた。岐阜の末広座には、名古屋の両興行の間に訪れている。

○又橘座の跡興行も 月白浪と大切の操三番は已に据りしが 都合に依て廿六日に打上 一座は其儘岐阜県へ行って興行と極り（中略）二月一日初日の見込なりと云（『歌舞伎新報』200号、明治15.1.27）

○岐阜末広座にて興行の菊五郎左団次は 去十三日同地打上 再び名古屋へ戻ると彼地より報（同203号、明治15.2.20）

末広座では菊五郎・左団次の出迎えにも大いに力が入った様子である。

○名古屋打上一月卅日午後三時美濃路をさして出立 笠松の渡船場に着す 此川向ふは笠松宿とて繁栄の地 爰へ岐阜末広座の者一同揃ひの着物にて出迎ふ 是迄は名古屋の者送り来り 爰にて別れ帰る 兼て人力車数輛を雇ひ 是へ印として笹の枝へ白金巾の旗を付 是へ俳優の名前を名々に記あるを建る 夕刻末広座へ乗込 芝居の前には 昔し顔見世に付しといふ場釣提灯の様なる 役者名前付の提灯を沢山に灯し 見物黒山の如し 舞台へは椅子を並べ 是へ役者一同かける 是が着祝ひの手打あつて 各々旅宿へ退散す（略）（同206号、明治15.3.2）

これだけ力を入れて迎えた一行の興行は大好評で、「我勝に見物はいり 忽ち小屋中一ぱい立錐の隙なし」、「此地の見物は名古屋の違ひ 至つて人気よく 悪口わるほめなぞするもの更になく 真の御見物計り それゆゑわれかへる程の人なれど 極穏やかに二日目に出揃ひ 至つて景気よく 大入〜」（『歌舞伎新報』203号）とある。後者では名古屋と比較して岐阜の見物はマナーが良く、行儀よく大勢が詰め掛けていると述べられている。

橘座に戻ってからの彼らの興行も好評で、もう一興行をと要望されたが「菊五郎・左団次の両人は、先づこゝらで帰京するのが上首尾ならんと其頼みを堅く謝して断りしよし。」（『官報雑誌』3月14日）、「久しく当地に滞留せし俳優菊五郎・左団次もいよいよ明日勢州へ向け当地を出途すると聞く。」（同紙3月16日）とあるように、名古屋の地を離れた。菊五郎は岐阜滞在中に養老の瀧の見物に出掛け（『歌舞伎新報』206号）、岐阜ならではの風物も楽しんだようである。

② 明治16 (1883) 年 2 月 末広座 (団十郎)

演目は、伽羅先代萩、極付幡随長兵衛。この興行も①と同じく、団十郎一座は名古屋での興行の合間に岐阜を訪れている。1月13日から24日に名古屋の末広座で、着三升伊達襦袢、東名物演劇錦絵、極付幡随長兵衛。いったん岐阜を訪れた後、2月23日に名古屋の末広座に戻り、二の替りで鏡山錦栞葉、名筆反魂香、小野道風青柳硯を出した。

○名古屋末広座は大当りにて 一月廿四日千秋楽 翌廿六日同地出立 岐阜の末広座へ一興行 廿九日に大入の由 当狂言は矢張先代萩と長兵衛 是を打上 又名古屋へ帰り二の替りなり (『歌舞伎新報』282号、明治16.2.2)

上記記事では29日初日 (大入) としているが、実際には次掲引用にあるように、2月5日初日、11日千秋楽だった。すなわち岐阜での興行は正味7日間である。当初の予定も8日であり (『歌舞伎新報』280号、明治16.1.27)、名古屋興行の間に挟まった岐阜興行は、このくらいの長さが適当だったのだろう。

○兼て御披露した岐阜の三升の一座は いよへ去る五日が大入にて 相変わらず (でんばう故か) 一ぱいの見物にて例の団十郎の長兵衛には感心のよし 又兼て同地では国豊座と末広座の両方より団十郎を所望せしが 終に末広座の方へ相談極りしゆゑ 国豊座では向張る気で 同八日大入にて 木戸銭三銭の大安値にて 尾上いろは、三杵源五郎、嵐理之助、尾上多見太郎、中山駒五郎などの一座にて 狂言は花上野に布引の三段目 巴御前の飯焚に菜種の御供にて 是も景気がよいとのこと 彼地より報知のまゝ (『歌舞伎新報』285号、明治16.2.17)

○兼て美濃岐阜にて興行の団十郎権十郎の一座も 先づ可成なる入にて 目出度去十一日に舞ひ納め 直に一同名古屋へ戻り同十五六日頃は入の積りにて稽古にかゝりし由 (同286号、明治16.2.22)

この岐阜興行で注目したいのは、引用前者の二重下線部にある国豊座と末広座の団十郎の取り合いである。有名役者団十郎がぜひ欲しいと張り合った両座は、やはり岐阜の伊奈波の芝居小屋の双壁であった。この争いでなぜ末広座が団十郎を勝ち得たのか、その経緯をぜひ知りたいものである。団十郎を得られなかった国豊座は、負けじと「大安値」の芝居を出し、双方好評だったとは目出度いことである。同地の賑やかさが目に見えるようである。なお、国豊座の役者たちは詳細不明の役者ばかりで、名古屋または岐阜の地元役者であると考えられる。彼らの解明も今後の課題である。

もう一点注意したいのは、「1. 末広座」で挙げた『美濃乃魁』の挿絵である。挿絵中の役者名看板と名古屋末広座興行役者で一致するのは、確認できただけでも市川団十郎、市川権十郎 (1848～1904、2代、明治7年襲名)、片岡いてう鶴、沢村国三郎 (3代、生没年未詳、慶応2 (1866) 年襲名)、中村重作、市川団右衛門 (不明～1889、初代、明治7年改名)、市川今戸助である¹⁵⁾。姓のみ判読できる岩井某は、看板が大きいことから類推して岩井紫若 (4代、1854～1889、明治11年襲名) だろう。これだけの役者名の一致と同書が7月に刊行されている事実から、

2月の末広座興行を写した挿絵と考えていい。この3年後に焼失する末広座の姿が、図らずも残されていたことになる。

岐阜末広座で7日間興行した団十郎一座は、名古屋での二の替りも好評のうちに終えた。3月30日に東京へ戻った団十郎は、新富座一同に迎えられた(『歌舞伎新報』291号、明治16.3.31)。筆者の現在の調査では、明治期に団十郎が岐阜を訪れたのはこの一度しか確認できていない。

③ 明治20(1887)年9月 国豊座(菊五郎)

演目は、四千両小判梅葉、一谷嫩軍記。前年に末広座が焼失し、大掛かりな劇場としては国豊座しか存在しなかった時期である。①②と同様、名古屋での興行の間に岐阜興行をしている。9月8日から17日に名古屋末広座で四千両黄金白浪、銀世界箱根根道、音菊左小刀。岐阜興行を挟んで二の替りが10月8日から19日に同座で五十三駄扇宿附、一の谷嫩軍記、勢獅子牡丹花笠である。国豊座の初日については、以下の記事がある。

○大入の景況 国豊座一昨日大入の景況は 前夜即ち二十二日の夜より当市中及び近郷近在より夥だしく詰掛け 二十三日午前三時頃に至りては 小屋前きより善光寺辺迄 見物の者立錐の地なく満ち渡り 其混雑は実に非常にして 三時三十分頃より札を売出せしに 四時半頃にて既に見物場は塞がり 木戸をメ切り 来客を断りたるを以て 後れ馳せの三百余名は遂に入ることを得ず 失望して帰りたり(後略)(岐阜日日新聞、明治20.9.25)

○岐阜来状 同地より廿九日付にて弊社へ届きし来状に(前略)去る十七日名古屋打上 同廿日岐阜の相談整ひ 同日同所伊奈波(地名)の国豊座へ乗込 同廿三日大入 名古屋同様人気よろしく 狂言は名古屋で興行した「四千両、左り甚五郎」の中へ「一の谷陣屋」を出す(後略)(『歌舞伎新報』826号、明治20.10.4)

初日23日の前日に、菊五郎は岐阜県庁に挨拶に行き、夜は知事の接待を受けている。①②では見られなかった行動で、20年頃までにこうした慣例ができたものであろうか。役者一行は鵜飼を楽しんだ模様である。

○尾上菊五郎 目下伊奈波国豊座にて興行中なる尾上菊五郎は 去二十二日 本県知事書記官の邸に伺候せし由にて 同夜は知事より 菊五郎 家橘等を長良の双碧楼にて饗応せしめられ 鵜飼を見物したるよし(岐阜日日新聞、明治20.9.25)

○(前略)サアサア一同船へ乗るべしと 家形船二はいに人数を分ち 鵜船数艘附属船として長良川へ押出す 此屋形には同地ゑりぬきの芸子八名乗込 お酌の役を勤め 鵜遣ひは爰を晴といろいろの芸を遣り 鵜の遣ひ方も別段の腕前を現し 是を一杯遣りながら見る心地よき 言わん方なし(後略)(『歌舞伎新報』826号、明治20.10.4)

後者の引用を見ると、芸子がお酌してくれる酒を飲みながら、かなりいい気分で鵜飼を見物したことが分かる。鵜匠も、県知事や大物役者に見せるということで、張り切っている以上以上の技量を見せたとある。翌日の初日の芝居に影響はなかったのだろうか若干心配になる。菊五郎は名古屋での興行が終了すると、滋賀県知事に会ったり、愛知県知事や特別に愛顧を受けた各紳士

の邸を訪問したりしている。岐阜の場合と同様、土地の有力者への挨拶を欠かさない配慮である。岐阜興行の後、大垣から興行の引き合いがあったが（岐阜日日新聞、明治20.9.29）、結局は大垣ではなく、伊勢山田で興行してから帰京したらしい（同11.11）。

④ 明治29（1899）年6月 国豊座（左団次）

演目は、菅原伝授手習鑑、慶安太平記。岐阜市歴史博物館にこのときの番付が所蔵されている。左団次一座は、京都から岐阜へ来て、それから伊勢、名古屋を回るというルートで動く。5月11日から26日に京都常盤座で、有職鎌倉山、箱根靈験鬘仇討、菅原伝授手習鑑、源平魁躑躅、暗闘伊達模様好織分、慶安太平記を上演し、非常の大入りであったという¹⁶⁾。京都から岐阜へ来ることは4月末から定まっており、その移動も記事で確認できる。

○国豊座と左団次 岐阜市伊奈波国豊座に於ては 昨今京都に於て興行中の左団次一座を招きて開演する計画あり 狂言には一番目菅原伝授手習鑑 大序より寺子屋迄 中幕鬘の仇討 二番目未定にて乗込は多分六月初旬になるべしと（扶桑新聞、明治29.4.26）

○高島屋一座は予定の如く 去月廿六日を以て京都常盤座を愛でたく打上げ 左団次は翌廿七日稲荷へ参詣し 次の日京都三番汽車にて岐阜へ着すれば 当地の芸妓等一同出迎へて賑はしく豊竹座（ママ）へ乗込み 頗る上景気の由 七日頃には同座を打上げ 名古屋の末広座か伊勢の古市かの中に乗込む筈なりとは 過日同一座よりの消息（『歌舞伎新報』1643号、明治29.6.8）

引用後者の「豊竹座」は、他の資料から考えて国豊座の誤りと判断した。後出の豊国座も同様である。国豊座の初日は6月1日、千秋楽は8日で大変な人気であった¹⁷⁾。

○高島屋一座の消息 別項に掲げたる如く 同丈一座は初岐阜豊国（ママ）座に初日を打つや 小屋の前に大丸太を以て二三重に矢来を組み 夕六時にいたりて幕を明け 当日総幕出揃となりしが 前に京都にありしと同じく上景気にして 舞台花道の大半は見物に埋もれ 続いて日に〜大入極めたれど 九日を以て千秋楽とし 直に伊勢山田古市長盛座に乗込みて八日間興行 続いて名古屋城下新築の劇場にて開業式として 狂言は一番目『真書太閤記』中幕『大盃』二番目『松田喧嘩』を演じ なほ伊勢興行より小団次も加はる由（『歌舞伎新報』1644号、明治29.6.18）

○また 当日は国豊座前混雑の為め 軽傷者五名を出したる程なりしといふ（扶桑新聞、明治29.6.2）

怪我人が出るほど見物が殺到したとは恐れ入る。『岐阜日日新聞』には連日左団次一座の興行人気の記事が見られる。前者の引用にあるように、左団次一座は岐阜・伊勢・名古屋と回ったのだが、実際は更にその後豊橋でも興行してから東京に戻っている。「名古屋城下新築の劇場」というのは、7月1日開場の西栄座で、左団次一座の興行は12日までである。この興行の背後には、先年来左団次の出勤の約束を取り付けて手附金も払っていた名古屋の末広座が、なぜうちではなく西栄座に出勤するのかと立腹し、遂には左団次を解約してしまったというトラブルがあっ

た。西栄座に関しては、開場に際して「名古屋同盟五座」が反対して衣装等を同座に貸与しないといた騒ぎも起きている¹⁸⁾。

左団次の岐阜滞在に話を戻そう。興行中の6月5日、左団次一行は鮎漁を楽しんだ。その賑やかな様子を、以下長文になるが引用する。

○同丈の長良川の鮎漁 同一座のなほ岐阜豊国（ママ）座にて興行中左団次丈は 去る五日同座打出の後 清涼丸、牡丹丸、藍見丸等なほ数艘の屋形船をしつらへ 之に幔幕を張り高張を掲げ その間口には岐阜提灯を列らねたり 県下の紳士数名を招待し 同丈妻女を始として 門下には米蔵、小米、升若、荒次郎、菊四郎、菴女等門弟一同より 作者衣装方床山に至るまで 一座を従へて夕六時某長良橋より乗込み 同地に有名なる松半主人所持の周旋行届き 且屈指の芸妓等は席に侍したりしが 八時と覚しき頃 川上より六艘の鵜飼船を漕出しぬ 此夜月こそなけれ星きらめきて 清風徐に袖を払ひ 船は金花山 稲葉山の絶壁に沿ひて縦横に舵を操る 此光景を弄して 傍には鵜飼の鮎漁に打興じけるに 之を聞付けたる芝居戻りの人々は更なり 市中の豪家等は又船に乗り来り 忽にして数十艘は爰に浮び出て 歌ひつ舞ひつ 一向我をもてなしたり 我等はその捕へたる鮎を其場に料理して 之を肴に一門の芸尽しなどして笑ひさゞめき 充分に歡を尽くして十時を過ぐる頃に長良川を下りて帰路につきたりと（『歌舞伎新報』1644号、明治29.6.18）

芝居を終えた役者と芝居の関係者の一団が、心づくしの準備が整えられた船で賑やかに漕ぎ出し、涼風に吹かれながら風景を楽しみつつ鮎漁に興じる。それを見た芝居戻りの人々や豪家の者が我も我もと船を出し、歌と舞と料理をともに楽しんだ様子を羨ましく想像する。実際左団次たちの興行は観光振興にも一役買ったようである。

○鵜飼の繁昌 国豊座の左団次一座の演劇見物を掛けて来岐する人多き故 昨今長良川の鵜飼も毎夜遊船多く出て 繁昌の体なり（岐阜日日新聞 明治29.6.7）

役者とその仲間たちは、訪れたいずれの地においても、その土地ならではの楽しみを持ったであろうが、彼らが岐阜の地で鵜飼や鮎漁を堪能していたと思うと愉快である。

以上、現時点の筆者の調査で判明している団菊左の岐阜での興行について述べた。①②③は名古屋興行の間に岐阜興行を挟んでおり、やはり名古屋劇壇との関連が深いことが分かる。③④では岐阜の地を役者たちも楽しんでいたことを示している。②では末広・国豊両座の団十郎争い的事实や『美濃乃魁』挿絵を参照することで、多面的に状況を示すことができた。今回は東京の団菊左を追ってみたが、典拠として『岐阜日日新聞』と『歌舞伎新報』に大きく頼っていることは自覚している。今後は前出の実川延若等の上方役者や、名古屋もしくは岐阜地元役者の興行についても解明したい。

おわりに

本稿は、末広座と国豊座の姿をより鮮明に具体的に描くことを目標にしていた。不十分な点は多々あるが、両座の開場後の動向や、団菊左の来岐の事実を手がかりとした岐阜興行の特徴、岐阜を楽しむ役者の姿などを示せたと自負している。しかし、当然ながら行く道は遙か遠い。本稿のまとめに代えて、今後の課題を記すこととする。

① 伊奈波地域の芝居興行一覧

「3. 両座の興行資料」で挙げたH)、I) の資料を確認し、情報をまとめる。その際に芝居以外の見世物等を含めるかどうか、検討が必要である。また、新聞記事だけではなく、番付も残存しているはずなので、それらを探索する必要もある。

② 上方役者、地元役者の興行

名古屋を訪れた上方役者が、団菊左と同様に岐阜にも立ち寄り興行していることが予想される。また、人名事典等には全く現れないが名古屋や岐阜の芝居ではたびたび名前が出ている役者たちのことも知りたい。4代中村嘉七の一門と思しき「七賀」のつく役者が突破口になるだろう。

③ 相生座、花角座の動向

伊奈波地域にあった小規模の小屋についても整理する。相生座については、所有者が加藤与三郎であると判明しているので、この人物を手掛かりにできるだろう¹⁹⁾。

④ 興行実施までの段取り

両座の団十郎の取り合いのとき、両座のだれがどう交渉をしたのだろうか。名古屋興行の合間に岐阜に役者を呼ぶ段取りをつけたのはだれか。個人所有の末広座と、会社組織となっている国豊座では興行の段取りに違いはあるのか。勧進元、差配人などについて調べなければならない。

⑤ 地歌舞伎・地芝居との関連

岐阜県は全国的に見ても地歌舞伎・地芝居が非常に盛んな地である。伊奈波地域ではあまり見られないようだが、全く無関係と言い切ってしまうことは躊躇される。地歌舞伎・地芝居について知見を深めてから、この問題について考察するつもりである。

本稿の調査の延長線上にある①②については、着実に実行していきたい。③については、末広・国豊両座と並行して相生座等のデータも拾っているの、時系列で整理することは難しくないだろう。不明点が多くまだ焦点を絞りきれていない④⑤については、先行研究を参照しながら、今後踏み込んでいきたい。本稿及び今後の調査が、岐阜の芸能の一端を明らかにできれば本望である。

謝辞

本稿を成すにあたり、多くのご教示、ご協力を得ました。岐阜の伊奈波地域の芝居についての調査で試行錯誤しているところに、岐阜市立図書館から「第32回文学ライブ」(2014年10月31日)の講師の依頼を受けました。岐阜に関連あるトピックが望ましいということだったので、それま

での調査で判明したことを中心に講演をさせていただきました。同講演でいったん調査内容をまとめる機会を得られたことは大変ありがたく、岐阜市立図書館の皆様にご感謝申し上げます。

その講演にお越しくくださった篠田壽夫先生（元豊田工業高等専門学校教授）には、講演終了後お話をうかがうだけでは時間が足りず、後日面会のお時間をとっていただきました。お忙しいなか快くご面会くださり、非常に有益なお話をうかがい、資料をご教示いただきました。先生からのご教示がなければ、本稿は成立しませんでした。どうもありがとうございました。

篠田先生から、末広座所有者の後裔である国島幹名子様のお名前をお聞きし、無礼を承知のうえで国島様にご面会をお願いしたところ、ご快諾をいただきました。血縁者ならではの具体的なお話をお聞きし、貴重な写真や末広座の緞帳から製作した屏風をお見せいただいたことで、末広座が本当にこの地にあったという事実が圧倒されました。人から人へと続く縁が本稿を豊かにしてくれた僥倖に感謝しております。改めてお礼申し上げます。

資料の閲覧については、岐阜県博物館で末広座の鬼瓦の現物を見せていただき、撮影もご許可いただきました。また、同博物館の図録『平成十三年度秋季特別展 七代目団十郎と国貞、国芳』収載の岩佐伸一先生のご論考「岐阜いなば芝居と七代目団十郎」をご教示いただきました。岐阜市歴史博物館では、国豊座の番付の閲覧と写真撮影を許可いただきました。両博物館の皆様にお礼申し上げます。

縁あって職を得た岐阜の地に、ささやかながら研究を続けることで貢献していきたいと思っております。今回ご協力、ご教示くださった皆様にご心より感謝申し上げます。

なお、本研究は、JSPS 科研費25370213の助成を受けたものです（研究課題名：幕末から明治初期の岐阜の芝居（劇場と役者）の実態）。

注

- 1) 「伊奈波三座」のもう一座とされる相生座または花角座は、末広座や国豊座より規模の小さい小屋であった。相生座は明治23年4月に寄席から「演劇場」に改築されている（岐阜日日新聞、明治23.3.7、同4.8）。本稿では開業当初から本格的な芝居の上演が可能だった末広・国豊の2座を取り上げた。
- 2) 残念ながら、この番付及び後掲の同年10月の番付の現物は未見である。
- 3) 「私は、或ひは即き、或ひは離れて、巧みに歌舞伎を淡化し、現実化し、自然化し得て、而も作為をも舞台上の調和をも破壊するに至らなかつた俳優を、明治年間に求めて、上京以前には、嘉七の七賀助、上京後には九代目団十郎を憶ひ出すと言つておく。」（『逍遙選集』12、春陽堂、1927、pp.141-142。下線筆者。以下の引用にても同様）
- 4) 「七賀」を名に持つ役者については、稿を改めて検討するつもりである。
- 5) 明治24年の濃尾地震前に再建されたのかは不明。22年10月1日の『岐阜日日新聞』に、「旧末広座跡」で相撲興行とあることからこの時点では未再建である。時期が飛ぶが、34年刊の『岐阜県案内』の「劇場及寄席」に「末広座 劇場にして末広町に在り」とあることから、このときまでには再建されていることが分かる。
- 6) 同書を中心となり執筆した篠田壽夫氏（元豊田工業高等専門学校教授）には、直接面会し詳しい情報を教えていただく機会を得た。後述の国島幹名子氏についても、篠田氏からご教示いただいた。篠田氏からは、新聞記事「岐阜歳時記 伊奈波かいわい4 全盛築いた末広

- 座」(岐阜日日新聞、1976.1.11朝刊)もお教えいただいた。
- 7) 岐阜県郷土資料研究協議会が1975年に復刻したものを参照した。
 - 8) 本興行については後述する。
 - 9) 逍遙は「延若は、僅か二度しか観なかつた」と言いつつ、「如何にもふっくらとした自然の情味があつて」、「自然味と柔らかみを見せたのを憶ひ出す」(『逍遙選集』12、p.138)と評している。
 - 10) 該当するのは15代松井源水(1834～1907)。
 - 11) 「国豊座移転 国豊座近傍には 今後倶楽部を設置するに付 同座は今後末広町旧末広座焼跡へ移転する由にて 目下其地主と談判中なりと聞く」(岐阜日日新聞、明治20.10.1)
 - 12) 例えば『岐阜県案内』(明治34)「劇場及寄席」に「国豊座 劇場伊にして奈波社頭に在り(字順ママ)」とある。
 - 13) 国豊演劇合資会社は『岐阜県治一斑』の第2回(明治29年)～4回(31年)調査にも見られる。第5回調査から、同書の「商業 会社」の記載方法が、規模別に会社数を記すのみに変更されているため、個々の社名を確認することはできない。
 - 14) ただし欠号が多い。例えば、明治22年までの欠号は、16～18年、19年5～12月、20年1月1～24日、同3～5月、21年5～10月。
 - 15) 生没年等を記さなかった役者は、詳細不明の者である。
 - 16) 常盤座興行については、『近代歌舞伎年表 京都篇』3に拠った。
 - 17) 当初は9日千秋楽の予定だったが、1日早まった(岐阜日日新聞、明治29.6.9)。
 - 18) 西榮座については、『近代歌舞伎年表 名古屋篇』1に拠った。
 - 19) 例えば、『岐阜日日新聞』の明治22年12月8日「相生座の大普請」に加藤与三郎所有とある。

参考文献

- 『岐阜県史 通史編 近代下』岐阜県 1972
『岐阜市史 通史編 近代』岐阜市 1981
『近代歌舞伎年表 名古屋篇』1～8 八木書店 2007～14
『近代歌舞伎年表 京都篇』1～10・別巻 八木書店 1995～2005
『近代歌舞伎年表 大阪篇』1～9 八木書店1986～95
- 岩佐伸一「岐阜いなば芝居と七代目団十郎」岐阜県博物館『平成十三年度秋季特別展 七代目団十郎と国貞、国芳』図録 2001
倉田喜弘編『明治の演芸』1～6 国立劇場調査養成部芸能調査室 1980～85
国立劇場調査記録課編『歌舞伎俳優名跡便覧(第四次修訂版)』日本芸術文化振興会 2012
清信重『岐高百年史』岐高同窓会 1973
坪内逍遙「少年時に観た歌舞伎の追憶」『逍遙選集』12 春陽堂 1927
特定非営利活動法人わいわいハウス金華・岐阜市歴史博物館編『ふるさと岐阜・魅力発見大作戦 岐阜町金華の誇り』岐阜新聞社 2009
富澤慶秀・藤田洋監修『最新歌舞伎大辞典』柏書房 2012
福井熊次郎編輯『農商工技芸 美濃乃魁 名所国産の手引』岐阜県郷土資料研究協議会 復刊

1975

野島寿三郎編『新訂増補 歌舞伎人名事典』日外アソシエーツ 2002

『明治十五年七月十二日～二十二年十二月二十九日「岐阜日日新聞」見出し一覧（発行順）』岐阜市歴史博物館 1988

「岐阜歳時記 伊奈波かいわい4 全盛築いた末広座」『岐阜日日新聞』1976年1月11日朝刊

「わがふるさと百年の歩み 盛り場・南下・劇場」『市政グラフ コミュニティぎふ』7 1989

『歌舞伎新報』

『岐阜日日新聞』、『岐阜新聞』、『貳大学区愛知新聞』、『扶桑新聞』、『扶桑新報』、『金城新報』

